



248号
2019/11

日中文化交流市民サークルわんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



スマホ片手に：四川省チベット族の街「康定」は昔、茶葉古道の中継地だった。今は狭い谷間に高層ビルが林立する近代都市だ。市街道路は谷に平行だが、ショートカットの階段が随所にある。その階段の途中にある広場で、土地のおばさんがスマホ片手に休んでいた。
(四川省康定にて 2019年7月 佐々木健之撮影)

‘わんりい’ 2019年11月号の目次は20ページにあります

今月は、ある程度の収賄は文化的に容認されていた中国としては珍しく清廉潔白なお役人のお話です。

・>・>・>・>・>・

北宋に勤勉で学門の好きな富弼ふひつと言う人がおりました。彼は努力の結果朝廷の大臣になりました。

ある年、北方で契丹が兵を挙げ北宋に攻めかかって来て、朝廷に多くの領土を割譲するようにと要求しました。朝廷は直ちに富弼を契丹に派遣して、契丹人と談判させました。富弼は、契丹人を説得して、領土割譲の要求をあきらめさせ、北宋王朝の利益を守ることに成功しました。

何年か後には黄河が氾濫し、多くの農民の家屋や農地を押し流したので、帰るべき家を失った農民たちが徒党を組んで都へ押し寄せました。富弼は国中から食料を集めて、道中の至る所に給食所を設けて、粥を配り、農民が必要とする様々な物資を集めて自由に持って行けるようにして、農民の苦境を救う工夫をしました。後の世の人々は、「富弼は語り継がれるべき立派な、徳の高い大臣だ」と賞賛しました。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：徳＝品格と徳行；望＝声望、道徳心が高く、名望が高い。

使い方：張先生は徳高望重（行いが立派で声望がある）なので、誰もが先生を信頼している。

・>・>・>・>・>・

以前にもお話ししましたが、北京滞在中（もう15年以上前になりますが）、清朝・乾隆時代けんりゅう、最大の汚職大臣・和珅のお話をテレビで見ました。

お話は、和珅がどんなに巧妙に乾隆帝に取り入り、皇帝の寵愛を良いことに、権力を一身に集め

て汚職もやりたい放題にした様子を描いたものです。和珅の同僚の大臣で、穏やかで常識的な人がいました。一見、清廉潔白で汚職には縁がなさそうです。いつも穏やかで、意見を求められると、常識的な判断を示し、皆から信頼される老練な大臣でした。

お話の中で、この大臣は、官職を求めて相談に来る人々に決して約束はしません。勿論、賄賂のような金品は受け取りません。しかし官職に欠員が出た時は、人物の適性を見極めて任命するので、決して頼まれたからではないのですが、頼んだ方はその大臣のお陰と考え、お礼の金品を届けます。

ドラマでは、和珅と対比させて、自分の利益だけのために賄賂を取って権力を使う和珅に対して、自分の利益は考えず国のためだけに動いても、権力のある人のところにはお金が集まることを示しかったのでしょうか。

挿絵 満柏氏



昔の中国では、このようにお礼の金品を受け取ることは収賄の罪には問われなかったのでしょうか。

今の世の中は贈収賄を厳しく取り締まっていますが、なかなか根絶できません。人間の本性が、権力とお金を好む傾向にあるからでしょうね。しかもこの二つはお互いを助長する関係にあるようですから、そこに私利私欲が絡むと、「徳高望重」などという言葉はすっかり忘れられてしまいます。

「権力者がその力を自分の利益のために行使するのは、人間として恥ずかしいことだ」という認識をどうやったら持ってもらえるのでしょうか。刑罰を厳しくするだけでなく、こういう人達にこそ「道徳教育」を徹底すべきではないかとかんがえますが、如何？

前回は白塔についてご紹介しましたが、白塔のある白塔公園に隣接してあるのが「広佑寺」です。この寺院も遼陽市の観光名所の一つですが、数々の運命に翻弄されているのです。もともとこの地には古い寺院があったそうですが、広佑寺として歴史に登場して来るのは、金(1115年～1234年)代で、前号に触れました「清安禅寺」からとなります。第5代世宗皇帝の母の貞懿皇后が、1135年夫の死後北京から生まれ故郷の遼陽に戻って建ててもらったのが清安禅寺というお話をしてしました。

そして彼女の死後、息子の世宗が母の死を悼んで建てたのが白塔です。従ってこの地は世宗母子の魂の宿る地と言えましょう。

白塔公園を歩いてすぐの場所に広佑寺がありますが、その入口に立ちのぼるよう

に「牌坊」がこれ見よがしに屹立しています。「青石牌坊」と呼ばれる巨大な石の彫刻です。高さ16.9メートル、長さ34メートルもあり6本の柱の上に立っています。牌坊は中国独特な鳥居型の装飾用の建築物で、私も中国各地で見かけましたが、確かに巨大と思います。旧時多くの町の中心地や名勝地等に建てられたものだそうです。この周辺では白塔と共に必見の建築物です。

この寺院の案内などを見ると、世界一と自慢できるものが五つあると書かれています。それは――①青石牌坊、②青銅香炉、③大雄宝殿、④木製の金箔

仏像、⑤宮灯、です。何も世界一と表記しなくても欧州やアメリカなどにはこのような文化は無いわけですから、中国一とすべきを何でも世界一と書きたがる夜郎自大の精神が垣間見られますね。本殿の前に置かれている、②の香炉は確かに巨大で100人が一度に線香を立てられるくらいの大きさですね。西洋式の湯船の形をしていますが、日本のお寺や神社の前に置いてある玉ねぎ型の香炉は中国にもあるのでしょうか？日本で玉ねぎ型の日本一の香炉はどこ



雪景色の白塔と廣佑寺(中国サイト「遼寧在線」より)

のお寺にあるのでしょうか？③大雄宝殿もこの手の建築物では確かに中国一かもしれません。建物の前に立ちますと威圧感で圧倒されそうになります。瓦屋根が三層に積みあがっていて宮殿のようです。ただ残念ながら広佑寺のすべての建物は後述するように2002年に

再建されたものなのです。しかもそれまでに存在した建物とは異なり、明や清代の建物の風格を加えて建てたもので、何と評価すればいいのか困りますね。確かに大きさだけは中国一でしょうが・・・④の金箔仏像も確かに大きくて光輝いています。中国各地を旅しますと各地で巨大な仏像に遭遇します。この仏像より大きな仏像はいくつもあると思いますが、木製では中国一ということで、他の大きな仏像は鉄製だったり、銅製や青銅製だったり石造りということなのでしょう。最後の⑤の宮灯という言葉は中国語の辞書にも出ていますが、八角形または六角形の

房飾りのついた灯籠のことで、天井からぶら下がっているものです。その昔、宮廷で使われたことからこの名が付いたそうです。大雄宝殿の宮灯はこれも巨大で美しいものです。高さが4メートル、重さが1トンというので一見の価値があります。確かに今の広佑寺は、巨大尽くしで中国人のプライドをくすぐるのかもしれませんがね。

ここで広佑寺の歴史を振り返って見ましょう。前述しましたように1135年頃貞懿皇后のために建てたのが、清安禅寺でした。その後、遼はモンゴル族(元)に滅ぼされ元の時代となりました。元の時代に清安禅寺は、理由は分かりませんが今の広佑寺に改名されました。1368年に元は明に敗れ明の時代となりました。その明が1372年に遼陽を攻撃したのです。明が天下を取ってもこの地方は従わなかったようですね。そのため広佑寺は焼失しました。しかしながら1383年に再建されました。それから500年余りは明から1644年に清が天下を取ってもなんとか無事に経過したようです。ところが1900年に発生した「義和団事件」で、すべての伽藍は灰燼に帰してしまいました。白塔まで及ばなかったのは本当に幸いでした。

義和団事件は、その前から義和団という団体があったわけではなくその背景や経緯は複雑で、全容を正確に述べることは難しいのですが、簡単に書けば次のような事件であったと言えるのではないのでしょうか。1894年～95年の日清戦争で日本に敗れた清国の足元を見て、西欧列国(英、仏、露、独、伊など)及び日本が力づくで中国に租界地などを認めさせ、さらに宣教師によるキリスト教の布教を強引に進めて行ったのが原因と言えるでしょう。民衆がこうした状況に対し排外的な行動をとったのは至極当然であり、義和団という形にまとまり、山東省から起こった紛争が北京、河北省に広がりを見せました。最終的に8か国連合軍は租界地や自国民保護という名目で義和団の鎮圧に乗り出し、制圧した事件でした。

それではなぜ北京周辺の紛争がかなり離れた遼陽まで及んだかですが、実は広佑寺伽藍を徹底的に破

壊したのは、ロシア軍だったのです。ロシアは8か国連合軍に入っていました。あまり鎮圧に熱心ではありませんでした。それより遼東半島の利権に力を入れたようです。日清戦争後の三国干渉で手に入れた東清鉄道の充実に注力したのです。これが1904年に始まった日露戦争の伏線です。東清鉄道の中で遼陽は重要な地点であったことは第1回目で述べた通りです。遼陽の駅を設け周辺にロシア人街を作り上げ、一大要塞化したのです。なぜ広佑寺を壊したのか不明ですが、遼陽駅から近くにロシア軍の訓練用に広い敷地でも必要だったのでしょうか。それから約100年後の2002年に、見事再建したというわけです。このような経過を見る時、いつそのこと世界一と誇れる寺院を作ろうではないかと思ったのでしょうか? もう一つ付け加えれば地下にはいくつにも仕切られた壁に数えきれないほどの金色に輝く地蔵菩薩(中国では地蔵王菩薩という)が嵌め込まれており、信仰心の篤い方は一見の価値があるでしょう。

前回の白塔と今回の広佑寺にかなり紙面を使いましたが、あと一つだけ書いておきたいことが有ります。それは、白塔公園内に「遼陽神社」があったことです。中国民衆からすれば他国に日本の神道を持ち込んでけしからん、ということでしょうが・・・この神社は普通の大きさでどちらかと言えば、こじんまりした神社だと思います。勿論旧日本軍が造ったものですが、実は大連市内にも「大連神社」が建っていました。敗戦後、大連神社の建物の部材は日本に持ち帰ったわけですが、遼陽神社はどうなったのか分かりません。神主さんはいたのでしょうか? いくら戦争を始めても心の拠り所は、必要だったわけですね。今回は、まず清朝の基礎を造り、後金(後の清)初代皇帝の愛新覺羅努爾哈赤(ヌルハチ)を紹介していきます。(つづく)

今回のお題は、おなじみ李白の七言絶句、『越中懷古』(別名『越中覽古』)と『蘇台覽古』でした。共に『唐詩選』にも載っている非常に有名な作品です。この二首は組詩とも言えるもので、呉越の戦いを題材に、呉越双方の視点から、いずれも過去と現在を巧みに交錯させながら歌い上げています。

呉越が互いに興亡を繰り返したのは春秋時代、孔子(前552～前479)が生きた時代とほぼ重なります。孔子の死から数年後、紀元前473年に呉王の夫差が越王勾踐に破れ、呉は滅亡します。

唐の時代の李白(701～762)からすれば、呉と越がしのぎを削った時代は、つわものどもが夢の跡、遙か昔の物語なのです。呉と越の戦いは、人口に膾炙した「呉越同舟」や「臥薪嘗胆」などの四字熟語とともに壮大な歴史ドラマを生みました。

絶世の美女西施や、呉王の重臣伍子胥と越王の軍師范蠡らが繰り広げた歴史絵巻は、後世さまざまな尾鰭をつけて語り継がれ、伝統劇や映画、テレビドラマ等の題材にもなっています。伍子胥は賢臣でありながら、最期は夫差に疎まれ自害します。もし、夫差が伍子胥の諫言に従い、捕虜となった越王の息の根を止めていたら、呉が亡びることもなかったでしょう。

復讐の鬼としても知られる伍子胥の残した名言「死者に鞭打つ」「日暮れて道遠し」は日本でも慣用句としてしばしば使われます。また越王に仕えた軍師范蠡は、自分の献策によって越が勝利した後、奢り高ぶる勾踐を見限り、「狡兎死して走狗烹らる」の名言を残して越を逃れます。「この范蠡は船で斉の国に渡り、マネービルディングで巨万の富を得たと言われているのですが、これも本当かどうか分かりません」と植田先生。史実は全く違ったかもしれませんが、私の好きな陳舜臣さんの『小説十八史略』では呉の宮殿から密かに救い出した西施を伴って斉に逃れ、大

資産家になった。しかし、こんな最高の人生などあり得ないと、范蠡を架空の人物だという説を唱えている人がいるが、完全な架空の人物ではないにしても、色々な人物の良い方の業績が彼の名のもとに集められた可能性はある、と書いています。

さて、李白は数え年25歳の時、故郷の四川を離れ、都長安を目指す旅に出て長江を下ります。仙人に憧れていた李白は道中、様々な人々と出会い、色んな経験をしたようです。各地を転々としたあと、長安に辿り着き、玄宗皇帝に気に入られ、宮廷詩人として活躍しますが、2年足らずで追放され、再び流浪の旅に出ます。その旅の途中で訪れたのが呉楚の地です。

まず『蘇台覽古』から。

sū tái lǎn gǔ lǐ bái
蘇 台 覽 古 李 白
jiù yuàn huāng tái yáng liǔ xīn
旧 苑 荒 台 楊 柳 新
líng gē qīng chàng bù shèng chūn
菱 歌 清 唱 不 勝 春
zhī jīn wéi yǒu xī jiāng yuè
只 今 唯 有 西 江 月
céng zhào wú wáng gōng lǐ rén
曾 照 吳 王 宮 里 人

きゅうえん こう だいやうりゅうあら
旧苑荒台楊柳新たなり。

りょう か せいしゅうはる た
菱歌清唱春に勝えず。

ただいまただせいこう
只今惟西江の月のみ有り。

かつ ご おうきゅうり
曾て照らす吳王宮裏の人

次いで『越中懷古』。

yuè zhōng huái gǔ
越 中 懷 古
yuè wáng gōu jiàn pò wú guī
越 王 勾 踐 破 吳 归
yì shì huán jiā jìn jīn yī
义 士 还 家 尽 锦 衣
gōng nǚ rú huā mǎn chūn diàn
宫 女 如 花 满 春 殿
zhī jīn wéi yǒu zhè gū fēi
只 今 唯 有 鸕 鶒 飞

えつおう こう せん

越王句踐呉を破りて帰る

義士は家に還るに 尽 く 錦衣

宮女は花の如く 春殿に満つるも

ただ いまだ しゃ こ

只今惟鷓鴣の飛ぶ有るのみ

この二首は一説には、長安に至る前の726年に『越中懐古』を、727年に『蘇台覽古』を作ったと言われています。また、追放された後の作品だとする説もあるようです。はっきりしたことはよくわかりません。

まず『蘇台覽古』から意味をみてみましょう。「旧苑荒台」とは、荒れ果てた呉の宮殿跡を指します。昔の王宮の遺構に、新たな柳の目が出て、ゆらゆらと風に揺られている様子が目に浮かびます。「菱歌清唱」とは、菱の実を摘む若い娘たちの清々しい歌声が聞こえてくることです。「春に勝えない」とは、春の感傷に耐えないということか。なんとなく悩ましげに響きます。起句は視覚から入り、二句目は聴覚で承けます。この対照がさりげなく、しかも実に見事です。

「西江」とは、蘇州の西を流れる長江のことか、蘇州城内を縦横に流れる川の一つかもしれませんが、今、李白の目の前にある川面を照らす月の姿が見えるようです。その月はまたかつて呉の王宮の美女たちを照らした月でもあります。なお、この「西江月」という言葉は、後に楽曲の名称となり、多くの人に時代を超えて歌い継がれました。「呉王宮裏の人」とは、華やかに着飾った宮廷の女性たちの姿、あるいは呉王夫差の愛妃であった西施のことか。西施は、呉王夫差を籠絡するために范蠡が送り込んだ絶世の美女と伝えられています。呉王はその策略にかかって治世をおろそかにし、その結果、呉が滅亡したということになっています。

さて、「春に勝えず」という言い方ですが、これは李白の前にも使われたことがあるそうです。「この〈不胜春〉は李白の造語ではありませんね。でもとても

新鮮な響きを感じます。どうも李白はパクったようなのですが、元の詩はパツとしなくても、李白が使うとこれがまた恐ろしく目立つんですね。今は著作権とかケチなこと言いますが、昔は良いものは良い！ って感じだったんでしょうかね。」と植田先生。「春に勝えない」とは、意味がはっきりせず、諸説あるようですが、恐らく、春の感傷に耐えられない、何となく悩ましくてたまらないなあ、という気分のようなようです。けなげに働く少女たちの澄み切った素朴な歌声に耳を傾ける李白の姿が目には浮かびます。もっと遡れば、「楚辞」にも既に「春を傷む」という表現が出てくるそうです。

「日本人は秋になると何となく感傷的になりますが、中国人は春に感傷的になるようですね。〈傷春〉や〈惜春〉は女性的イメージで、漢詩の中によく出てきます。愛する人と別れた女性の悲しみを表します。あつという間に過ぎていく春に女性の一番美しい時を重ねていたのでしょうか。昔は人生五十年ですからね、四十で老人ですよ。私は二倍生きましたけどね」と植田先生が仰ったので、苦笑いがあちこちに渦巻いたようです。アラフォー女子も「四十は老人！」に心中ガーンとショックを受けておりました。しかも、もうすぐ五十に手が届きそうなのだから、そろそろ死期を感じる年だったんですね。私の周りの素敵なお姉様方からは、「女は五十からが面白いのよ。」なんて聞きますが、この時代の女性達は本当に気の毒だったと思います。だって、女性は何歳になっても綺麗でいたいし、愛されたいですからね(笑)。

また、「傷春」に対して、「悲秋」という言葉がありますが、こちらの方はもっぱら男性のイメージで、戦争や刑罰、厳しい人生を連想するそうです。男性にとっては容貌の衰えより、自身の活躍を阻まれたり、成長や目標への努力が報われないまま空しく年が過ぎていく悲しみの方が大きかったのでしょうか。

さて、三句目の「只今惟西江の月のみ有り」は、作者の心の中で現在と過去が交錯するところです。「この現在と過去の対比が実に見事です。現在と過

去との交錯と言え、素朴な少女たちの歌声と艶やかに舞い乱れる宮女たちとの対比に、その伏線が見られます。ところで李白は歴史をロマンチックに歌い上げるのが得意ですね。杜甫は歴史を厳しい目でみえています。歴史は教訓として捉えるのと、ロマンとして捉えるのと両方ありますが、日本人はどうやらロマンとして捉えるのが好きですね。だから、日本人はどちらかという李白が好きですね。尊敬できるかどうかは別として……。杜甫は〈詩聖〉と呼ばれるだけあって、好き嫌いよりも、尊敬！という感じですかね」と植田先生。なるほど、日本人は私も含め、歴史にロマンを感じる人が多そうです。だから、邪馬台国論争も忠臣蔵も、そして三国志なんかも人気があるのでしょうか。

さて、一首目の音読練習のあと、『越中懐古』の解説を聞きました。起句から意味を見てみましょう。越王勾踐が呉を破って帰国してきた。兵士達は皆錦にしきの衣ころもを身に付けて我が家に帰っていく。宮女たちは花のように宮殿に満ち溢れていたことだろう。しかし、今はかき消されたように何も無い。ただ鷓鴣しよこの群れが寂しげに飛んでいるだけだ。

越王勾踐は会稽の敗戦で受けた屈辱を忘れまいと、日々苦い獣の胆を嘗めながら耐え忍び、遂には呉王夫差を破ります。一、二句目では勝利に酔った戦士達の誇らしげな姿が目には浮かびますが、三句目では、呉王の後宮から連れて来た花のような宮女達がひしめく華やかな宮殿が見えてきます。戦いに勝つまでは、と禁欲的な生活に耐えてきた越王勾踐が、勝利のあと女性達を侍らせて羽目を外している姿が想像されます。しかし、その栄華を極めた王宮も今では鷓鴣しよこという鳥の群れが空しく飛んでいるだけの寂れた風景になっている、というものです。

「鷓鴣の鳴き声は、甲高くて耳ざわりがあまり良くないですね。でも、鳴き終わって声途切れた時にある種の寂寥感が残ります。『鷓鴣飛』という横笛の曲があるんですがね。恐らくこの詩がもとになっているのでしょう。横笛の音も耳ざわりはあまり

良くないですが、音が途絶えた時に何とも言えない寂しさが漂いますね」と植田先生。鷓鴣と言え、鷓鴣と同じキジ科の鳥ですが、以前学んだ劉禹錫りゅううしやくの詩『踏歌とうか』にも失恋の寂しさを連想する効果として使われていましたね。「華やかなりし昔も、今では全て儂くなってしまった。この詩は前の一首と同様、歴史ロマンに無常観という一種のニヒリズムが加わって、日本人の心を揺さぶるものがありますね。たった四句なのに、壮大な歴史ドラマを感じさせます」と植田先生。「臥薪嘗胆の〈臥薪〉は作り話かもしれませんが、〈嘗胆〉の方は、『史記』にもありますが、〈臥薪〉はないんですよ。ドラマ好きとしては、「臥薪」もあって欲しいですが、改めて想像してみると、薪の上に寝るなんて、王様にはありえなかったかもしれません。

色々お話を伺った後は、また音読練習をし、最後は質問の時間もありました。ある参加者の方から、「三句目の〈満春殿〉は平仄的には、〈春満殿〉の方が正しいですね。漢字をひっくり返しても意味は変わらないと思うのですが、どうでしょう？」という質問がありました。これには、植田先生も「確かにそうですね。私のミスプリントかと思いましたが、うーん、手元の資料も〈満春殿〉になっていますね。こればかりは李白さんに聞いてみないといけないかな？ 近いうちにね。」とまたまた植田先生のユーモアが炸裂して、今回の漢詩の時間も終わりにになりました。今回も濃厚な講座をありがとうございました！

■付記

〈満春殿〉の平仄配置について

この句の平仄は粘法の定則に従えば、6字目は仄声となるべきところだが、前後の字が何れも仄声なので、ここを仄声にすると下の3字がすべて仄声になってしまう。これは避けなければならないので、この場合「挟み平」の例外則で、真ん中の字は平声に変えてもよいことになっている。したがって「満春殿」は仄＋平＋仄となり、平仄的には問題ない。また、意味的には、もちろん春は季節を表わす言葉だが、ここでは女性たちの姿を花に譬えているので、「花のように美しい女性たちのいる宮殿」という意味で敢えて「春殿」という表現を使ったとも考えられる。

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑦）

高島敬明

ラゴスに戻り、いろいろな出来事が有りましたが日常をようやく取り戻すことが出来ました。今回は我々の日常を紹介します。無事に戻って何週間か後の、作業が休みの日に皆で大型バスに乗り込み博物館と動物園に遊びに行きました。博物館は現地人の土饅頭の家の様子が展示されているくらいでしたが、一つだけ目を見張るものが展示されていました。それは当時のオバサンジョ大統領の革命による政権奪取の時の前大統領の乗用車で、ハチの巣のように穴だらけでところどころ血糊で真っ黒になっていました。オバサンジョ元大統領は、イギリス連邦に所属しているナイジェリア国の第5代大統領（1976年2月～1979年10月）で、その後第12代大統領（1999～2007年）も務めています。大の親日家で10回以上の来日歴がある政治家です。次に動物園に行きました。小動物から大きな猛獣までいます。ガラス越しの明るい照明の下には蛇の展示場が有りました。気持ちの悪い毒蛇がたくさんいました。ワイワイ言いながら見ていましたが、前回に書いたグリーンズネイクのところで足が止まりました。小さな木の葉の陰にいるもの、水辺に潜んでいるもの、なまめかしい緑色をした小さな蛇です。説明文には、生息地ナイジェリア全土、ラゴス近辺の水のきれいな川に多い、との通訳の話でした。作業員たちと黙って顔を見合わせました。

日常の生活では、毎朝黄熱病の薬を7粒飲むことになっていました。壁に貼ってある自分の名前のところチェックを入れて確認できるようになっていました。我々全員は飲んでいましたが、高価な薬のため雇人には飲ませません。運転手のエマニエルは完全に黄熱病にかかっていました。野口英世博士が倒れたのもこの病気です。エマニエルはいつも微熱があるのか体をだるそうにしています。それでも「エマニエル、ゴー！」と言うと、しゃきっとして運転を始めます。彼らはプロの運転手として運転を始めると物凄いスピードで走ります。それがプロの運転



ホテル前のアンダーツリーマーケットでの買い物

手だと思っているのです。「エマニエル、私は日本には家族がいるのだ。事故には遭いたくない！」と話すとも分かって「アイシー、アイシー」と神妙になります。ところが30分もするとまた元のように気が狂ったように走り出します。運転手の唯一の財産は運転免許証です。免許証の取得システムは知りませんが、オリジナルの免許証を持ち歩く事はまずありません。コピーした用紙を免許証として持ち歩いているわけです。この国の警察、公務員の給料日は毎月25日と決まっています。20日を過ぎると各所で警察の検問が始まります。毎月の給料が無くなってしまふ頃だからだそうです。黒人の車は余程のことがない限り止められることはありません。見ていると白人が乗った車だけです。日本人も「オイボ」と言って白人扱いですので車は止められます。するとエマニエルが「マスター、マニーマニー」と叫びます。1ナイラ（約300円）でいいそうですがそれを2cmくらいに小さく折りたたんで握手するように手に隠すように持っています。検問所でとうとう私の車になりました。エマニエルは現地語で何かしゃべりました。警官と握手しますと、「オーケー、ゴー」と警官の声がします。無事通過です。握手の時にダッシュ（賄賂）を渡したのだそうです。彼らには強いプライドがあり、お札を広げて渡せば絶対に受け取らず免許証の提示を求められるのだそうです。コピーでは検問は通過できずごたごたと時間がかかる

そうです。警官はチェコ製の短機関銃を胸に抱くように持っています。検問を通過する時たまに2～3人の警官が後ろで走りながらガシャガシャと機関銃の安全ピンをはずす音がします。この時は後ろから撃たれるのではと非常に緊張します。聞けば黒人の車が検問を突破しようとしたのです。私の車も間違っただけで後ろから撃たれても「逃げたから撃った」と言えば警官への責任は問われないうえです。

毎日の黄熱病の7粒の薬は非常に強力に体の解毒作用をしている肝臓には大変な負担になります。解毒が追い付かなくなると体全体が痒くなってきます。痒くなってきたと話す作業員には、「シャワーだけで湯船に入らないからな！仕方がないよ」と話しますが、後から到着した私も体全体が痒い気がします。Hマネージャーとその話題になった時、Hさんは「俺は肝臓が悪いから薬も酒も飲まないんだよ」と笑って話していました。ところが酒も飲まないと言っていたHさんが好きなウイスキーを浴びる様に飲んでいたので。周りを見るとハウスキーパーとT料理長が心配そうに成り行きを見ていました。Tさんは私に盛んに目配せをするのですが何のことか分からず、Hさんのお相手を続けていました。「高島君、体が痒いって？俺の部屋の風呂に入れよ！シャワーしかない風呂と違って気持ちがいいぞ！」と、言います。「いいですよ」「入れよ！」押し問答の末入ることになりました。Hさんの座った目が鋭く獲物を捕らえたようににやりと笑いました。部屋に入るとハウスキーパーが湯船にお湯を張っていました。湯船がいっぱいになるとすっとなでいなくなりました。私は仕方がないか、と素っ裸になりました。湯船に入ると何故かHさんが剣道の竹刀を持って来ました。会社の事務服のまま湯船のカーテンを開けて竹刀を杖にして手をのせ仁王立ちです。状況が普通でないで黙って入っていました。体も温まったので、「もういいか」と独り言を言って立ち上がろうとしましたが、「まあいいじゃないか、滅多に入れないんだから！」と仁王立ちです。命令口調になり同じことを繰り返し言われます。私はゆでだこのように真っ赤になって耐えていました。そのうちクーラーの風で揺れるカーテンを指し、誰かいると言いました。

そしてカーテンに向かって突進し、カーテンを竹刀で叩きつけました。バラバラと留め金が落ちて来ましたが湯船から出るわけにもいかず、体を出し気味に耐えていました。怒ったHさんは、ハウスキーパーを呼びつけました。チェチェと舌打ちしながら英語で怒鳴りつけます。キーパーは慣れた手つきで謝り私に出るように合図します。真っ赤な顔をして下着だけ持って私は退散しました。コックのTさんが飛んできました。「飲まなければいい人なんですが、飲むと人が変わってしまうんです。これで何人も被害に遭っています」とのことでした。

ラゴス港は非常に忙しい港です。港に入ってきた船への輸出品の積み込み、輸入品の下し作業、これらの一連の実務は現地の乙仲業者（乙種海運仲立業者）が担当します。船は岸壁での積み下ろしの順番を待って港外に碇を下ろし停泊して待つわけです。ラゴス港では約1か月から3か月の沖待ちを強いられるわけです。我々の荷物は工事現場での機器ですので現場工場の工程と連動しますから遅れるわけにはいきません。港の担当者と掛け合うわけですが、アフリカ時間でなかなか前に進みません。ダッシュの国ですのでやはりお金を使うことになるようです。そんな中ラゴス港の港長の奥様が日本人だということが分かりました。港長とお会いして色々とお話する中で船の沖待ちも解決していったようです。ラゴスの町には「日本人会」があります。商社の人達、昔からお住まいの人達、我々のような工事関係の短期在住者などいろいろです。私も赴任した年に作業員共々新人として催しに呼ばれました。女性の会員の出席が多く華やかな雰囲気の中で一段高い壇上で紹介されます。私が代表して挨拶しましたが、カドナの工事の話などしてやっと終わったような記憶があります。男だけの職場からミニスカートや綺麗な短パンの奥様方の前ですので目がくらみそうになります。違った人種の男達に見えるのか会の中でも人気者になってしまいました。ラゴス港の港長の奥様はなぜか一度も日本人会には出席されてないそうです。期間が終わればすぐ日本に帰る奥様方とのお話など聞きたくないのでしょうか。分かるような気がしました。今回はここまでとします。（続く）

4月27日(土)、亜土都ホテルの部屋に朝の光が差し込む。6:30起床、7:00朝食。タクシーで花蓮駅へ(180元[1台湾元≒3.5円]は今回のツアーで一番高いタクシー料金だ。それでも800円ぐらい)。花蓮駅9:58発の台北行き普通列車に乗る。10時ごろから雨が降る。羅東、宜蘭と過ぎ、12:45瑞芳駅に着く。瑞芳は著名な観光地・九份の入り口だ。手荷物預かりで荷物を預ける(大50元、小30元)。駅前の日本式拉麺店で昼食(みそ拉麺99元)。駅前からタクシー乗車。乗るなり「♪浪花節だよ人生は」、「夢芝居」、テレサ・テンの歌が流れてきた。九份の町並みが見えたところでタクシーを降りた。雨が降っている。九份の町並みは入り組んだ狭い路地に雑貨店がひしめき合うように並んでいる。映画『悲情城市』(1989年)の舞台になったことから一躍名が知られ、観光地になった。

狭い急勾配の石段を上り、商店の連なる路地へ。とにかく、人だらけで前に歩くしかない。ひと回りして喫茶店で休憩(ホットコーヒー180元、ミニ盃のおみやげ100元)。

路地が交差した広場の奥に、小さい映画館が



九份の「悲情城市」の看板(筆者撮影)



忠烈祠の閲兵の交代(筆者撮影)

あった。ここでは毎日『悲情城市』を上映しているそうだ。(日本に帰国してから『悲情城市』をレンタルビデオ店で探したが、残念ながら置いてある店はなかった。

▼台北の町を楽しむ

タクシーで瑞芳駅に戻り、夕刻の電車で台北に向かった。台北に着いてタクシーで宿舎の「新客来商旅ホテル」へ向かった。チェックインを済ませてから町なかへ。人と車とバイクの多い町だった。繁華街で日本食の店を探した。浪花君が現地の人に声をかけ、得意の中国語で店を聞き出した。ビルの1階に「美食広場」(日本食の店が集まったフードエリア)があった。丼物、カレー、麺類などのメニューが豊富にあった。僕はエビフライカレー(150元)を注文した。日本で食べるものより味は落ちるが、まあ食べられないことはない。

翌朝、4月28日(日)、いよいよ台湾での最終日。ツアーも終わりに近づいた。6:30起床、ホテル向かいのセブンイレブンで朝食を買った。ホテルを出発してタクシーでMRT台北駅へ。駅のコインロッカーに荷物を預けようとしたが、

ロッカーの不具合で係員を呼び出し、修復するのに時間を取られてしまった。9:05 発の電車に乗車（25 元のチップ型切符）し、MRT 士林駅で下車。タクシーで故宮博物院に向かう。中国本土と台湾にある故宮博物院だが、台湾には優れモノが多いという話もある。入場チケット（350 元）を買い、2 時間の見学時間をとって各自で自由に見て回る。この博物院で有名なのがヒスイで造られた「白菜」（バタとキリギリスも白菜にとまっている）と「肉片」だが、あいにくこの二つともがこの日はなかった。他に貸し出しているとのこと。広大な展示室でとても回り切れない。日本の武具や仏像の展示室もあった。この日は日曜日とあって博物院は大変な混みようだった。

近くのセブンイレブンで昼食をとり、午後は近くの「忠烈祠（ちゅうれつし）」へ。「忠烈祠」は辛亥革命を始めとする中華民国の建国および革命、中国大陸での日中戦争などで戦没した兵士たちを祀った大きな祠だ。観光客の目当ては、1 時間ごとに 20 分間行われる衛兵交代式だ。施設の建物の 2 カ所に配置された直立不動の衛兵たちが、ロボットのような立ち居振る舞いで交代の儀式をこなす。

さらに、MRT 台北 101 駅に向かい、人気の商業施設「台北 101」を見学。MRT 台北駅に戻って駅のコインロッカーで荷物をとり、MRT 桃園国際空港駅へ。

出国手続きを済ませ、20:40 搭乗し 21:00 離陸（ピーチア

ビエーション MM860 便）した。

日付が変わった 4 月 29 日（月）、午前 0 時 55 分、羽田国際空港に着いた。真夜中だけに羽田空港の建物内には人も少ない。ただし、各階の休憩所にある椅子席はほとんど人が座っているか寝そべっていた。始発電車まで構内で仮眠、早朝、厚木と大阪に分かれて解散した。

▼台湾あれこれ

台湾の日常生活での数量の目安は 600g である。例えばコンビニの飲料水は、台湾では 600 ml だ。岩本さんが台湾茶を買ったが、1 パックは 600 g だった。この 600 グラムを一斤（いっきん）という。

帰国してから調べてみると、一斤は元来 600 g であったが、本家中国が 1 斤=500 g に見直した。その時、日本は 600 g のままであり、台湾は日本統治下であったので、日本の度量衡単位が導入され、従来から使われていた 1 斤=600g を継承した。ということらしい。

沖縄諸島の那国島からわずか 100km あまり西



101 ビル（筆者撮影）

に浮かぶ熱帯・亜熱帯性の気候の島・台湾。台湾は九州よりも少し小さい島国でありながら、人口は九州をしのぐ 2300 万人。そして、前述のように島の東側には長い屏風のように、標高 3000m を超える山々が 200 座以上もある。その山々の盟主が 3952m の玉山だ。台湾最高峰の玉山は、古くは台湾原住民のツォウ族の言葉でパットンカン（八通関/石英を意味する）、19 世紀半ばには西洋ではモリソン

山と呼ばれていた。日本統治時代には富士山よりも標高が高いことから、新高山と名付けられたことはあまりに有名だ。太平洋戦争勃発のハワイ・真珠湾攻撃の際の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」にも使われた。戦後、台湾政府は清の時代に使われた呼び名である玉山に山名を戻して今日に至る。

帰ってから、アルパインツアーの「玉山ツアー」をネットで見た。4月23日出発で桃園空港集合、バスで阿里山に向かい1泊。翌日、バスで登山口に行き、玉山をめざすというコースで、24日に我々と登山道で出会ったというわけだ。東京、名古屋、大阪、福岡の各出発地とも4泊5日、24万2000円の参加費用だった。我々は6泊7日で半額以下の費用ですんだということだ。浪花芳法くんや協力してもらった台湾の皆さんに感謝するのみ。謝謝。

台湾に関わる映画を探してみた。何件かのレンタルビデオ屋さんに行った。見つかったのは『セディック・バレ』『KANO』『国姓爺』の3本。どうしても観たかった『悲情城市』は見つからなかった。そのほかに『国姓爺』『湾生回家』、台湾映画最大のヒット作『海角七号』、『台湾アイデンティティ』『恋恋風塵』などなども。結局、台湾映画は中国や韓国映画ほどレンタル作品になっていないということが分かった。執念深く探していれば、いつかそれらの映画にお目にかかる日が来るかもしれない。

玉山登山の記念になる玉山がらみの土産物が全くないのが不思議だ。Tシャツやパノラマ写真、ファイルなど販売してくれたらきっと買うのに。そう思うと残念だ。

ガイドについても感じたことを書いておこう。ガイドの小綿羊さんは体は大きくはないが、ガ

ッシリと屈強な体つきで頼もしい。女性達が少しバテ気味だったときに、すかさず彼女達の荷物の一部を取って自分のザックに押し込んで担いでくれた。その足運びは小気味いいテンポだった。気になったのは、先頭を歩くペースだ。ガイドのペースが少し速くて、我ら4人との間が結構離れた状態で終始歩くことになってしまった。後続の歩くペースに気を使う必要があったと思う。後続で何かが起こったときにすぐに声がかかれなくなってしまう。実際、岩本さんの足がつった時に、ガイドとの差があったために浪花くんがとっさにホイッスルを吹いたが、そうしなければガイドは気が付かなかっただろう。その点、浪花君の対応は良かった。また、小休止の時間があまりにも短いのも気になった。「5分休憩」と言いながら、実際にはわずか2～3分で出発していた。こんなこともあった。玉山登頂の朝、ガイドから深夜1時30分起床だといわれていたのに、ガイド本人は2時に起きてくる始末だ。山頂からの下山のとき、拝雲小屋からの下りが異常にハイペースだったのもおかしい。0.5キロを10分のペースで下った。本来はどこかで昼食をとるために2食分を買い込んでいたのに、結局、昼食もとらずに、登山口に12時15分に着いてしまった。こうしたことも事前にパーティーに話しておくべきだろう。異国の山の異国のガイドのため細かい意思疎通がかけるのは仕方がないが、ガイドとしてのあるべき姿は万国共通のものがあるはずだと思う。

(完)



玉山の一等三角点

多言語習得へのヒント

木村 博美

今まで現役時代は海外の仕事が主体で、英語で仕事をする事が多くありました。その過程で他の外国語にも興味が湧いてきて数か国語を表面的に学んでみました。勿論簡単な日常会話が主体ですが英語やラテン語との関連性に突っ込んでいくと面白さが増します。具体的には英語、フランス語、スペイン語、インドネシア語、中国語で今はドイツ語を学んでおります。この6か国語は駐在したインドネシア語を除きほぼ独学で習得しました。その過程で気づいた点をあげますので参考にしてください。

1. フランス語

大学時代に綺麗な言葉だなと感銘し、シャンソンの楽譜を取り寄せ一人でこっそり歌ってました。私のやり方は日常会話で頻繁に使われる基本表現に絞ってみました。スタンダードなどの文学書やルソーなど大作品ではとても難しく先に進まないことが分かったからです。後述しますが、スペイン語、イタリア語もラテン語がルーツとなっており、冷やかしてラテン語のテキストを見るとなんと共通の言葉が多いことか。入社数年目にベトナムから視察団が来日し英語で通訳をしましたが、相手はあまり得意でないのでフランス語でどうかと提案があり怖いもの知らずでやってみました。フランス語は彼らにとっても外国語であるフランス語特有の悩ましい発音が少なくクリアでわかり易かったです。

2. スペイン語

娘一家が転勤（夫が商社勤務の日本人）でメキシコへ赴任したのがきっかけです。同じラテン系の言葉で類似単語、表現が多くて驚きです。南米の先生についてグループレッスンを受けてました。大部分の人はスペインまたメキシコ駐在経験のある人でしたが、ほぼ一年で簡単な時事問題ぐらまで討議できました。フランス語と比べ苦労したのはスペイン語では通常主語を省略することが多



バングラディッシュの人達と

くなります。そうすると動詞の語尾変化をピンポイントでやらないといけないのです。これには今でも苦労していますが、発音はほとんどローマ字読みで通じるので日本人にとってはなじみやすいのではないのでしょうか。

3. インドネシア語

今から30年前に同国に駐在した関係で初めて出会いました。簡単日常会話は半年あれば誰でもしゃべれます。今でも覚えていて家内と機密の話をする場合便利です。例えば来客があり「今晚夕食誘う？どうする？」なんてことを確認する場合があります。旧植民地だった関係でオランダ語が入ってます。薬局はアポテック、事務所はカントール、冗談話と思われませんが、切るはポトン、魚はイカン、お菓子はクエ、赤はメラ、オランウタン（オランは人、ウタンは森）。ナシゴレン、これはお分かりですね。多分関係性はないでしょうが、私はスペイン語とごちゃごちゃになる場合が時々あります（笑）。

4. イタリア語

勉強したことはありませんが、簡単な文章を聞いたり見れば大体類推できます。やはりルーツがラテン語だからでしょう。筆者はアマチュアのバ

イオリニストですが、楽譜には多くの表号や記号がありますがイタリア語で表示されています。皆さんもご存じのクレッシェンド（段々大きく）デクレッシェンド（段々小さく）これも Increase(増える)Decrease(減少する)と同じルーツです。イタリア大好き人間の筆者は今春ベネチアに女房共々演奏旅行に行く機会があり、一生の思い出となりました。映画でも「道」や「ひまわり」なんぞ何回見ても感涙です。もっと勉強していればよかったです。You cannot teach old dogs new tricks.(笑)

5. ポルトガル語

まったく勉強したことないですが、美しい言葉ですね。よくスペイン語に似ていると言われますが、意外にもイタリア語の方がスペイン語に似ているという人が多いのです。あの独特な音楽ファドには魅せられますね。

6. ドイツ語

今取り組んでいる格闘中の言葉です。イタリア語同様ドイツ語で楽譜への指示が多く書かれています。特に筆者が傾倒しているグスタフ・マーラーの楽譜はドイツ語だらけです。ボヘミア人でありチェコ人でもあり又ユダヤ人の彼はどんな気持ちでドイツ語で表示したのでしょうか。なぜ私が格闘中なのか。それは上記のラテン系統の言葉と単語も大きく違うし【もちろん英語とは類似語多くありますが】分離動詞とか少なくとも私にとっては極めて難解な言葉です。例えば私はバイオリンを弾きたいという場合にはラテン系であれば大体 I want to play the violin の語順なるもドイツ語では I want the violin to play になります。勿論その語順で覚えてしまえばいいのですが、長年染みついた癖はとりにくいものです。余談ながら Native を除いて日本で独学した者でドイツ語を流ちょうに話す人に会ったことがありません。フランス語、スペイン語、などは結構います。明治の文豪など例えば森鷗外なんぞはドイツ留学もし読み書きは上級レベルなるも果たして会話はどうだ

ったのか気になるところです。

7. 中国語

10年近くやっていますが、途中数年は何もせず実際真面目にやったのは、半年ぐらいで初級から中級レベルです。余談ながら筆者の現役時代に韓国に工場があり人件費削減の観点から中国に工場自体を移転しました。当然技術指導に数名の韓国人を中国に派遣しました。筆者が一年後現地訪問したところ、会議室から怒鳴りあう声が聞こえてきました。なんだろうと思って会議室に入ると工場長（中国人）と派遣された韓国人（副社長）の二人が激しい議論をそれもなんと中国語で戦わしていたのには驚きました。今後の値上げ方針にかかわる議論だったらしいのです。あとで韓国人の副社長に「貴方の中国語流暢だね。10年ぐらい駐在してたの？」と聞くと、「中国語は1年前に始めただけです」と言うのです。まったく驚愕しました。それにしても5~6年も駐在している日本人はなぜできないのか不思議だと言っていました。皆さんもお気づきのように隣国の中韓の人は語学のセンスにたけていますね。何故なのでしょう。この大命題は別途書きますが一言でいえば日本人の外国語会話が下手なのは次の二点です。世界でも最低部類になります。確か日本より低いのはなんと北朝鮮とアフリカの2,3か国で120位ぐらいです。耳の痛い方もいらっしゃるでしょうが、つまり—

1. 文法にこだわりすぎる。
2. 間違うと恥ずかしい。特に自分よりうまい人がいると委縮する。

練習法としてはブローケン英語であれ、ブローケン中国語であれ、大声で話し通すことです。日本で生まれた子供は SVO とか SVC とか文法を教えなくても流暢に話すではないですか！言葉より内容の方が重要ですよという人がいますが、それは当たり前のこと。そのうえでいかに自分の考え方をきっちり効果的に伝えるかです。私の経験談が何らかのヒントになれば幸いです。

柳田秀明さんは、わんりに参加されて5年になります。日中学院のロビーで棚に置いてあった会報‘わんりい’をご覧になり、「中国語で読む漢詩の会」を知って参加してくださいました。今は、毎週火曜日の「中国語勉強会」にも参加しておられます。柳田さんは、日本航空のパイロットとしてジャンボ機で世界の空を飛び回っておられました。今は退職されて「夢食」と名乗っておられますが、在職中の思い出など思い出すままに話して頂こうと思います。

飛行機はどうして飛ぶのかということからお話しましょう。私の親戚に飛行機のような鉄の塊が飛ぶのはあり得ない、と言う人が本当にいます。その方は自分の娘の結婚式を長崎で挙げるのに一人新幹線を乗り継いで長崎まで行きました。



筆者 35 歳の英姿

飛行機は翼で揚力を生み空に飛ぶのですがアラジンの絨毯のように空に乗って浮かぶのではありません。翼の上面で吸い上げられるようにして揚力を得ているのです。揚力の7, 8割は翼の上面で発生していると言われています。小学生の頃霧吹きの実験をしませんでしたか？ 管の上の空気が速く流れると管の下の水が吸い上げられて霧になる実験です。空気が翼の上面で速く流れると揚力が発生して飛行機は浮かびます。空気の流れる速度が遅くなると翼の上面の空気が翼の上面から離れ、飛行機は浮いて

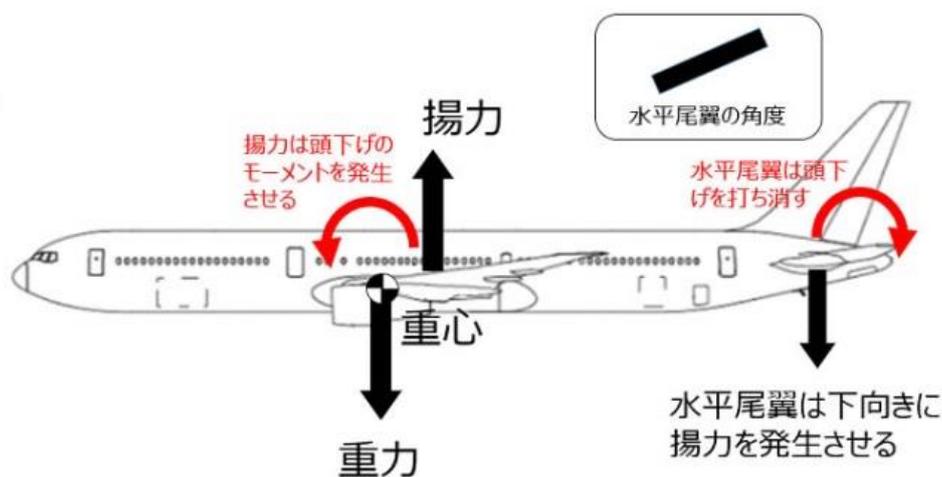
いられなくなります。これが失速です。

飛行機を設計する時の工学的理論も時代と共に進歩して、私が勉強した時とはずいぶん変わって来ました。理論的な発見により、飛行機はもっと安全になり、機体の材料もより強く、より軽くなって、空の旅は益々快適で安心なものになって来ました。

飛行機は地上ではエンジンの力で走っており車輪にモーターはなくブレーキしか装着されていません。地上での旋回は操縦席の横にある“輪”を片手で操作します。またボーイング 747(ジャンボ機の正式名)では先頭の子車輪と主翼の下の主車輪の距離は20数メートルあり90度曲がる時は十分に内輪差を取らないと誘導路から脱輪してしまいます。

小型機ではエンジンの逆噴射でバックを許容しているものもありますが大型旅客機ではバックできません。ウインカーやブレーキランプ、クラクションは付いていませんが、クラクションを鳴らしたくなるようなことは時々ありました。

(続く)



揚力の原理 (図は「イケてる航空総合研究所」より)

ゆめの郷・シーサンパンナ

第 29 回中国文化之日「孔雀の舞う楽園」公演の印象

寺西俊英

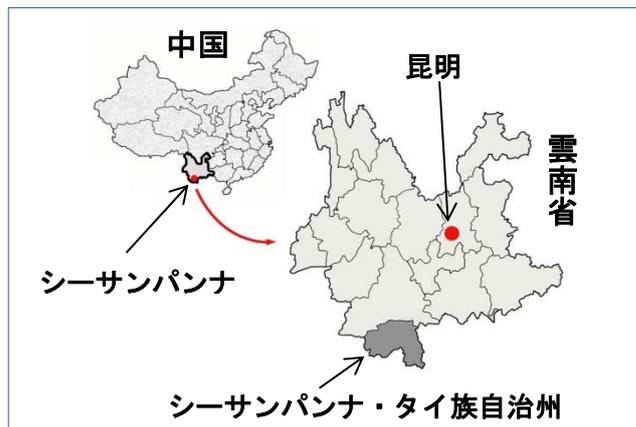
〈はじめに〉

私の印象ですと、ここ 10 数年前から雲南省の「シーサンパンナ・タイ族自治州」のシーサンパンナが脚光を浴びてきたように感じます。どのような所かを調べるために、ダイヤモンド社発行の分厚い旅行の本「地球の歩き方・2017 年～18 年版」を開きましたが全く紹介されていないのです。昔からの有名な観光地である昆明、大理、麗江、香格里拉などの紹介はありますが・・・仕方ないのでネットで調べますが、このような観光ガイド本を発行する会社はシーサンパンナに興味が無いのでしょうか？ 私はまだ行ったことが無いのでイメージがもう一つ出来上がりません。中国人の友人から時々現地に行って「素晴らしいところだった」というメールや何枚かの写真によりおぼろげな輪郭は頭の中に出てはいるのですが・・・

そのような時、日中友好会館からわりりい宛に「孔雀の舞う楽園」と題するシーサンパンナの少数民族歌舞公演のパンフレットが送られて来ました。それによると主催は日中友好会館と前述の自治州で、「中国文化之日」としてイベントを開催し、今回が 29 回目に当たるそうです。早速、月に一度の定例会でパンフレットを配ると、殆どの会員が「是非行きたい」と声を揃えて言い出したので、まとめて切符の予約をした次第です。公演の内容は後述しますがまず当日頂いた資料やネットの情報をまとめ、シーサンパンナがどのようなところか紹



艶やかな民族衣装



シーサンパンナはどこ？（ウィキペディアから）

介しましょう。写真と合わせてご覧ください。

〈シーサンパンナの概要〉

雲南省の一番南にあり、ラオスとミャンマーと国境を接する位置にあります。面積は、1.9 万平方キロメートルと、日本でいえば四国とほぼ同じ面積です。70%以上が森林で覆われ、中国唯一の熱帯雨林地方です。従って野生の象や虎そして今回の公演の名前になっている孔雀がいるそうで日本では想像もつかない地域ですが、少し怖い感じですね。

域内をメコン川の上流にあたる「瀾滄江」と言う名の川が流れています。シーサンパンナは中国語では「西双版纳」と書きます。名前の由来はタイ語の「シップソンパンナ…」が転訛したものです。シップソンは、〈12〉を意味しパンナーは〈行政単位〉を表します。12はこの地域に住む少数民族の数で漢民族を加えて13の民族が仲良く生活している地域なのです。12の少数民族合わせて人口の70%、残りの30%が漢民族です。

中国に限らず少数民族といえば民族衣装の美しさでしょう。筆者も民族衣装に惹かれる一人です。当日の公演に合わせて、12の少数民族の内6民族のきらびやかな衣装が中国友好会館1階の美術館に展示されていました。展示の民族は、「傣族（タイ族）」「瑶族（ヤオ族）」「拉祜族（ラフ族）」「基諾族（ジノー族）」「哈尼族（ハニ族）」「布朗族（プーラン族）」の6民族。帽子は自由に頭に載せてもいいコーナーがあり、女性の参加者が次々に被っ

て写真を取り合っていました。因みに中国は56の民族がいる多民族国家ですが、雲南省にはこのうち26の民族が暮らしています。なおタイ族は、東南アジア一帯に広く居住していますが、中国では雲南省に最も多く住んでいます。タイ族の中にはいくつかの系統がありますがその中で雲南省にはタイ・ルーが多いのです。ルー族は泰国の泰の文字でなく傣の文字で表します。タイ族の4月に行われる「水かけ祭り（撥水節）」は世界的に有名ですね。

近年日本人観光客にも人気の観光地になって来たようですが、米作中心の田園風景、藁葺屋根、高床式住居などが日本人の源を感じさせているからでしょうか。中国茶の種類は多いですが、この地方はおなじみの「プーアール茶」が特産でお茶の古木がたくさんあるそうです。一方でパパイヤ、マンゴー、アボカド、パイナップルなどの産地であり、日本の農村風景とは少し違うでしょうね。

最初にこの10数年来有名になって来たと感じたと書きましたが、実はこの地方は1980年に初めて外国人観光客に開放されました。さらに交通の不便な地方でしたが、自治州の中心地・景洪市に1990年に「シーサンパンナ・ガサ空港」が開港し、不便さが解消されたのです。従って外国人が気楽に行けるようになったのはここ20～30年前位からのことです。

〈「孔雀の舞う楽園」の公演〉

公演は、10月18日から20日の3日間行われました。どの公演時間も予約で満席状態でした。公演は10の演目からなり、出演は、「シーサンパンナ・タイ族自治州民族歌舞団」に所属している皆さんで、13民族120名の芸術家が在籍しています。司会は美しい日本語を話される張穎さんで、演目ごとに紹介をされました。いくつかの公演をご紹介します。

★女性群舞「孔雀の舞い」

孔雀は、タイ族の幸福の象徴だそうです。孔雀は神様が地上に送ったこの世で最も美しい鳥で羽を広げた美しさは比類のないものと筆者は思っていますが、その美しさを6人の美女が黄色のドレスに身を包み、高く舞い上る孔雀を表現した踊りは圧巻でした。

★男性象脚鼓舞「鼓舞神韻」



孔雀をイメージした黄色いドレスの群舞

シーサンパンナの森林に野生の象が生息していると紹介しましたが、タイ族の伝統楽器に象の脚に似ていることから「象脚鼓」があります。これを打ち鳴らしながら舞う力強い踊りは素晴らしいものでした。

★女性群舞「糸を紡ぐ娘たち」

ハニ族の女性は、糸車などの機械を使わず手紡ぎで糸を作るそうです。市場に行く途中などの時間を使い、歩きながらせつせと糸を紡ぐそうです。こんなハニ族の勤勉さや明るく情熱的な民族性を表した元気いっぱいの踊りでした。

★女性独舞「水を汲む娘」

タイ族の人々は水に対して特別な思いを持っているそうです。演じる女性は、2016年水かけ祭りの「美少女コンテスト」でグランプリを獲得したと紹介されました。体が柔らかくまるで水の妖精が踊っているようでした。

★布朗族(プーラン)族歌舞「祝福」

プーラン族は長い歴史を持ち、独自の言葉・歌や踊り、習慣などを口承によって伝えて来たそうです。「歌で気持ちを伝える民族」と言われるように明るく軽快なリズムと踊りは会場を沸かせました。

最後は、出演者全員によるファッションショー。それぞれの民族の文化的な特徴が表れた衣装は、どれも甲乙つけがたく素晴らしいものでした。終了後出演者は会場のそとに並んですぐそばで衣装を鑑賞できるように計らっていただきました。また一緒に気軽に記念撮影に応じたりするなど来場者に最後までおもてなしをして頂きました。

中国語発音公開講座開く——“わんりい”初の取り組み

講師：鈴木繁先生（日中学院の元副学院長）

2019年10月20日(日) 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室

“わんりい”はこれまで中国語教室を主宰してきましたが、今回は発音に限定した公開講座を企画しました。講師は、日中学院の元副学院長の鈴木繁先生、会場はまちだ中央公民館・視聴覚室。主として初心者のための講座として募集しましたが、参加者10名の内全く中国語を習ったことの無い人2人、ずっと以前に習ったけどすっかり中国語を忘れた人(失礼)4~5人、残りの方は現在中国語教室で習っている人といった構成になりました。

当初通常の授業のように先生に相對して黒板に向かって勉強するのかなと思っていましたが、鈴木先生はまず長テーブル二つを合わせ、二人が向き合うように直されて講座はスタートしました。現在習っている方も全員発音の基本から正確に習ったことのある方は皆無で、鈴木先生の理論的、かつ平易なご指導は時間の経過を忘れるほどでした。中国語の母音と子音における口の開け方を向かい合った二人がお互いの口の形を確認し合ったり、日本人が苦手な「n」と「ng」の発音のやり方、また「zi」と「ze」と「zu」の耳での聞き分け方などを色々な角度でご指導を受けましたが、一貫して言われたのは「母音がいかに大切か」ということでした。鈴木先生からは、「二人の初めての方は、基本に忠実でいいですよ」とお褒めの言葉がありました。少し習っている人はどうしても癖(?)が抜けきらないところがあるようです。以前習った方や現在中国語を習っている方は、もう一度原点に戻る

ことが出来て納得の授業となりました。この講座は午後1時半から4時半までの3時間でしたが先生のユーモアのある話を聞きながら予定した時間を楽しく過ごすことが出来ました。現在中国語を学習中の方からも、勉強を始める前にこのような講座を受けてから通常中国語講座を受講すればよかった、という声がしきりでした。

町田における公開講座は今回だけですが、この講座は参加者の評判も良く皆さんのご要望を受けながら来年の開催を検討する予定です。
(寺西俊英)



熱心に指導される鈴木先生



向かい合って受講する皆さん

25の小さな夢基金活動 日本雲南聯誼協会の活動と‘わんりい’

私共日中文化交流市民サークル‘わんりい’は、中国をはじめ、アジア諸国の皆さんとの文化的な草の根交流を目指し、27年以上にわたり活動して来ました。以前は京劇公演、中国民族音楽演奏会、各種の展覧会・講演会・学習会などを開催しましたが、歳月と共に会員の高齢化が進み、近年はあまり大規模な活動が出来なくなってきました。

そこで、アジアで活動する他の団体のお手伝いをしようと考えました。‘わんりい’が昔から続けている「中国語勉強会」、「中国語で読む漢詩の会」・「日本の歌を美しく歌おう！ボイス・トレの会」などは継続しています。が、その他に数年前から、日本雲南聯誼協会とラオス山の子ども文庫のお手伝いをするようになりました。

日本雲南聯誼協会は、認定特定非営利活動法人として、主に雲南省の少数民族の女子高生の教育支援や小学校設立に尽力しています。山岳地帯の少数民族の少女で、経済的な理由から高校への進学を断念する生徒を、協会会員がサポーターとして、1対1で3年間支援するプロジェクトを実施しています。このプロジェクトでは、支援を受ける生徒たちがサポーターに、新学期やクリスマス、春節など折に触れお礼のお手紙を書いて来ます。わんりいはそのお手紙の一部を日本語に訳すお手伝いをしています。

現在、‘わんりい’会員の内15名ほどが「翻訳勉強会」というグループを作り、年間3回ほどお手紙の翻訳を手伝っております。手書きの、判読に苦勞する文字に悩まされながらも、中国語の勉強になり、楽しみながら活動しています。

最近届いた協会の会報「彩雲の南」第70号では、会員の皆さんが6月に行われた雲南省での卒業式に参加された様子が紹介されていました。毎年、サポーターさんの中の希望者が卒業式に出席し、

そのあと少数民族の村を訪れて交流をされるようで、素敵な旅の様子が掲載されています。

会報に、この「25の小さな夢基金」と名付けられたプロジェクトのサポーター募集案内が同封されていました。興味のある方は、下記へ問い合わせください。‘わんりい’事務局へ連絡も可です。

「25の小さな夢基金」プロジェクト：経済的な問題や、昔ながらの慣習によって教育を受けることが難しい少数民族貧困女子を支援。雲南省にある「昆明女子中学」と協働し、彼女たちの高校生活3年間を1対1でサポートするプロジェクトです。

1口3万円/年（何口でも可）で卒業までの3年間支援します。

詳細は「**雲南 夢基金**」で検索出来ます。

問合せ：☎ 03-5206-5261

町田発国際ボランティア祭・2019 夢広場

11月3日 場所：町田市「まちの駅・ポッポ町田」
「ラオス山の民・モン族の刺繍小物」と
オリジナルトートバッグを販売！

2019 夢広場実行委員会主催による、第22回 町田発国際ボランティア祭「夢広場」（10：00～16：00）に‘わんりい’も参加、「モン族の刺繍小物」と会員手作りのトートバッグを販売します。

「モン族の刺繍小物」は、ラオス山岳民族・モン族の伝統的な模様が刺繍糸一本取りのごく細かいクロスステッチ刺繍され、ペンケース・ブックカバー・保健証入れなどいろいろあります。これらの販売収益は、ラオスで活躍する安井清子さん主宰の「ラオス山の子ども文庫基金」の資金になり、一部は製作者の生活資金となります。

また同時に、絵本作家である会員・佐藤紀子さん手作りのトートバッグを販売します。丈夫な布に佐藤さんのオリジナルな絵がプリントされた使い勝手が良いものです。この日のバッグの売り上げの一部は上記で紹介の日本雲南聯誼協会に寄付されます。

11月3日、「まちの駅・ポッポ町田」の「夢広場」で、是非、お気に入りを探してお求めください。

◆中国文化センターの催し◆

中国文化センター設立 10 周年記念展

中国文化センターが 2009 年に設立されて以来、当センターで行われた様々なイベントのチラシの展示、活動の写真、過去の展示品の再展示などでこれまでの軌跡をたどります。

毎年 1 省ずつ紹介している「各省の文化年」プロジェクトの回顧で、今迄取り上げた海南・河北・重慶・浙江・江西・天津の多角的な展示もご覧いただけます。

開幕式では、モンゴルミルクティーを呑みながら馬頭琴・呼麦・頂碗舞・格薩爾王（叙事詩ケサル王伝の一部）などの演技を楽しめます。

●会場：中国文化センター

展示期間：12 月 10 日（火）～14 日（土）

時間：10：30～17：30（初日は 15：00～）

●入場無料

- ・開幕式：12 月 10 日（火）15：00～16：00
定員 100 名
- ・集中講座：「蒙古族フェルト刺繍教室」
12 月 11 日（水）15：00～17：00
定員 30 名
- ・記念パーティー：12 月 14 日（土）
11：00～14：00 定員 100 名

●問合せ：☎03-6402-8168

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2 月と 8 月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿で作られています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話、これはと思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

▼11 月の定例会

11 月 12 日（火）13：30～

三輪センター第三会議室

▼12 月号おたより発送日

11 月 28 日（木）10：30～三輪センター

第二・第三会議室（弁当持参）

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します

年会費：1500 円入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

途中入会の方には会費の割引があります。

下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。「文化は万里につながる」の想いから名付けました。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

- ①年 10 回、会報誌‘わんりい’を送付
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しいカラー版‘わんりい’をお送りします。

◆町田国際交流センター（町田市民フォーラム 4F）、町田生涯学習センター（109 ビル 6F）、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

‘わんりい’248 号の主な目次

寺子屋・四字成語(27)徳高望重	2
「遼陽」という街 (3)	3
「漢詩の会」(34) 李白 越中懐古/蘇台覽古	5
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑦）	8
台湾一周&玉山登山ツアーレポート③	10
多言語習得へのヒント	13
退職ジャンボ機長の回想①	15
ゆめの郷・シーサンパンナ	16
中国語発音公開講座開く	18
25 の小さな夢基金活動	19
中国文化センターの催し・他	20

*『論語』あれこれ』は、前号で 50 回となり区切りもよいことから植田先生のご希望でひとまず終了といたしました。一休みして再度ご執筆をお願いする予定です。